

まえがき

「万物の根源は水である」とターレスは言った。「いや、万物の根源は原子である」とドモクリトスは修正した。かくして哲学がギリシャのはるか昔に誕生した。じみると哲学は最初、物理学として始まったものといえるかもしない。その後、ソクラテスが現れて、「汝自らの無知を知れ」と喝破して、むしろ、人間の知識そのものの源泉を問う課題を提起して哲学を知識論、人生論にまで拡大した。それを受けてアリストテレスは自ら論理学から生物学に至るまで現代に通ずるあらゆる学問を創出して、そのあとで、それら全体を貫通し、それら全体を束ねる高次の学問として形而上学を提示した。ここで「哲学」といわれるものの概略図が完成した。

歴史的には、ソクラテスの根拠を徹底的に掘り起こして、何が何でもその究極的根源を抉り出そうとするあくなれ理論的な試みであり、また同時に、つねに最高の高みに位置して、全体をくまなく見渡し、それらを遗漏なく束ねて統御しようとする意れを知らぬ学問的實為である。

その後、アリストテレスの哲学はヨーロッパ中世の学問の世界を席巻した。そこで「知識 (scientia)」の形而上学としての哲学が「万物の女王」として神臨した。しかつて「用ひられたscientia (science)

ところは現在用いられてゐるよつたな「自然科學」とこの意味はなく、単純に「知識あることは」学問を意味した。すなわち、諸知識、諸學問を全体として束ね、それらに根柢を置くべきものとして哲学が存在していたのである。

しかし、中世も終わり、やがてルネッサンス期を通じ、急激な科学革命の時期を迎えて、それまでみな新しい科学的発見の過程の中で知識の細分化と自然科学化が始まり、そして哲学と科学の乖離が始まる。ニコートンに始まる「輝ける科学時代」としての近代は、デカルト、カントに始まる「輝ける哲学の時代」でもあり、また同時に、哲学と科学がときに軋轢する不幸な離別の時代でもあったのである。

20世紀は危機の時代であった。悲惨な近代戦争が多発し、科学は殺戮の兵器化され、哲学は不条理に走つた。21世紀を迎えたいま、哲学と科学は「ポスト・モダン」の名のもとに再び接近と融和のときを求めているように見える。科学は近代的な明晰判明性のみを追求することを止め、曖昧とカオスに目を向け、そして人間そのものを研究対象とし始めた。また哲学は厳しく自戒を伴つて、再び科学に目を轉じ、「諸学の学」、「すなわち」「科学哲学」であらわとしている。これから哲学は何處へ向かうのであらうか。

哲学は徹底した「根源の学」であり、また厳しく「全体の学」である。したがつてそれはもつとも奥深く、もつとも難解な学問である。これを「3日でわかる」のは至難の技である。われわれはいまこれを試みようとしている。しかし、本書を読んで3日で哲学がわかつたと感じた人がいたとすれば、その人は驚くべき天才であるが、またま、救いよつてのない楽天家である。「3日でわかる」努力を無限

回繰り返してなおも知的満足を得られない人は常人である。その常人が本書に親しみ、さらに本書を越えて自らの思索を深められることを心から期待する。

2002年3月

監修者 坂本百大